

「常陸大津の御船祭と祭事船」 茨城県北茨城市

～神船曳祭りの由来～

「資治通鑑」巻二百十八唐紀三十四肅宗、至徳元載(756)の条に、山車、陸船に樂を載せて往来す、とあり、唐の時代に山車や陸船に樂(おはやし)を載せて往来している。「陸船は、竹木を縛って船形を為し絵綵をもって飾り、列人の中に於いて之をかつぎ以て行く」「陸船に幕装飾をしたものを人が担いで巡行したものである。」とあり、京都の祇園祭りの船鉾に似た形のものであったことがうかがわれる。ただし、船鉾は車のついた曳山であるが、唐の陸船は人が担いだ。



神船

大津の御船祭に使用する船は、実用の船を神船として曳くところに特色がある。佐波波地祇の神が現在の地に鎮座した後、潮出お浜下りの御出社の祭事が始まった。神社で祭典の後、神輿は大津町内を西町まで陸上を渡御し御仮屋で休憩、「滑津の浜」から神船にて海上を仲町まで渡御し、御仮屋にて一泊休憩する。さらに神船にて東町まで海上渡御し潮垢離した。その後、地形が変わり海が遠のくが道筋を変えることなく、海上と砂浜、そして陸上神船曳きを行うようになった。

～神船～

船の背丈を低くし神輿を鎮座させる櫓はサンチャ櫓と呼ばれ、これにうるし塗りの屋形を載せる。欄干の擬宝珠が輝く金色、みよし(船先)には紅白の手網をあやに組み、千鳥たすきをかけ、二本のバレンと純白の幣束が突き出し中央の幕は巴をぬいた紫地に七五三縄が張られる。船形頂上には白波と戯れる真鶴、屋形の四隅には巴の提灯が吊るされ、さらに青竹に組まれた屋根は紅白の幕におおわれ、両側に佐波波地祇神社御祭り(昭和59年より常陸大津の御船祭)の赤字に染め抜かれた提灯、船尾には不動の剣、五色の旗、両胴には海の幸、サンゴ等の宝物、お面などが描かれている。

～船曳～

神船に直径7センチ前後で、長さ200メートル余りの網を結び、船上に神官、囃子、水主(かこ)など約40数名をのせ、船底に約百丁のソロバン(堅木でつくられた四尺五寸の桁型のコロ)を次々と敷き並べ、両弦に20～30名の人が手足をかけ左右にゆらしつつ、曳手は約2～300名で進める。

みどころ



- 北茨城市漁業歴史資料館「よう・そろー」：北茨城市のブルー・ツーリズムの拠点として、大津漁港内に平成19年5月に開館。漁業の歴史や漁法を立体的に展示するほか、御船祭や祭事船等の伝統文化を紹介する。魚のさばき方から料理、伝統芸能の伝習や漁業体験もできるほか、物産館で地元の魚や加工品・野菜を購入できる。また、市場食堂では、新鮮な魚料理が提供されている。